

(Ⅱ) 各部会の概要

1 「学校支援地域本部」部会

◆第1回部会

期 日：平成23年6月17日（金）

会 場：大津合同庁舎 7B会議室

出席者：白石委員（部会長）、大塚委員、高木委員、竹綱委員、松田委員、村井委員

事務局：県生涯学習課（3名）

1 開会

- ・県生涯学習課 挨拶

2 協議

(1) 事業内容についての説明

本県における昨年度までの学校支援地域本部事業の概要説明

- ・学校支援地域本部事業の趣旨、事業概要
- ・滋賀県での事業実施状況
- ・学校支援地域本部事業の取組状況（成果と課題）

(2) H. 23 学校支援地域本部の取組状況説明

- ・10市町33地域本部における小中学校数、地域C数

◇意見交換

(3) H. 22 実態調査アンケート結果より

【3年間の取組から見える課題の観点整理・把握】

- ※リーダーシップ
- ※予算面
- ※連絡調整
- ※コーディネーター
- ※ボランティア
- ※研修について
- ※活動内容
- ※学校、教員の理解度



(意見交換の様子)

【今後の方向性の考え方】

- ※補助金事業では、事業の持続性は担保できない
- ※持続可能な仕組みの構築
- ◎委員の方々よりいただきました御意見等（別紙参照）

3 連絡事項

(1) 今後の部会の予定について

第2回部会 9月下旬 内容：部会および先進地視察研修

第3回部会 2月上旬 内容：今年度の取組のまとめ、次年度への計画

(2) 平成23年度指導者等研修会について

第1回 7月22日（金） 9:30～12:00 会場：県庁新館7階大会議室

内容：三部会合同研修 講師：村田和子氏

第2回 10月28日（金）10:00～16:00 会場：県庁新館7階大会議室

内容：地域コーディネーター養成講座

(講演・グループ討議・意見交換)

第3回 1月27日(金) 内容: 事業成果報告会(三部会合同)

4 閉会

◆第2回 部会

期 日: 平成23年9月26日(月)

会 場: 近江八幡市立北里小学校

出席者: 白石委員(部会長)、大塚委員、北居委員(奥田委員)、高木委員、竹綱委員、
松田委員、村井委員

事務局: 県生涯学習課5名

事例提供者: 近江八幡市立北里小学校長 村井 龍三氏

北里学区まちづくり協議会 子どものみらい部会 会長 谷智之氏

近江八幡市立北里小学校地域コーディネーター 今井 佳代子氏

1 開会

・白石部会長 挨拶

2 授業公開

・6年2組 総合的な学習の時間

「地域の歴史」 安達 智一 教諭

児童がこれまで地域の歴史について調べたことを
グループ毎に発表したり、地域の古老に質問したり
しているところを参観しました。



(グループ発表の様子)

3 協議

①北里小学校「学校支援地域本部事業」の取組について

- ・学校経営の中での本事業の位置づけ
- ・学校支援地域本部事業の取組状況についての報告
- ・学校、家庭、地域の連携による連携協働の持続的かつ安定的な「仕組み」づくりをどのように構築していくのか

②まちづくり協議会との接点について

- ・地域の活性化(ボランティアポイント)

③地域コーディネーターの取組について

- ・学校側のニーズに沿った支援活動と支援者側の意見の反映の工夫
- ・教員との連絡調整についての工夫
- ・ボランティアバンクの作成
- ・地域支援コーディネート計画表、広報の作成
- ・教職員の活動への理解の求め方(変容)

④北里小学校の実践から学ぶべきこと(質疑・応答)

- ・参観を通して
- ・報告から

⑤学校支援地域本部事業の今後の方策を見いだすためにしたいこと(意見等)

↓



(北里小学校の取組について)



※大切にしたいキーワード → まとめ

⑥「学校支援地域本部」部会の今後のスケジュールについて（確認）

- ・ 3 事業合同成果報告会 [1月27日（金）]：県庁新館7階大会議室
- ・ 第3回「学校支援地域本部」部会 2月上旬
- ・ 実践事例集のまとめ方について

◎委員の方々よりいただきました御意見等
（別紙参照）

4 閉会

- ・ 閉会挨拶



◆第3回 部会

期 日：平成24年2月8日（水）

会 場：コラボしが21 3階中会議室2

出席者：白石部会長（部会長）、大塚委員、高木委員、竹綱委員、松田委員、村井委員

事務局：県生涯学習課員（3名）

1 開会

2 日程説明

3 協議

テーマ：持続的かつ安定的な「仕組みづくり」の推進に向けて

(1) 今年度の部会経過および研修内容について

「学校支援地域本部」部会報告

地域コーディネーター養成講座の概要報告

(2) 第1回部会、第2回部会の意見内容の確認・補足
事務局より、意見内容報告

(3) 地域コーディネーターの育成、支援体制について

- ・ 選出方法、各地域（各校）での実際の支援について
- ・ 社会的地位を担保するための有償性の確保のあり方

* 県内取組事例をもとに

・ 県教育委員会の役割

・ 力量形成について

・ 地域コーディネーターの声が活かされた学校マネジメント

(4) 学校支援地域本部と他の取組とのあり方について

* 簡単なことの実践から



（意見交換の様子）

4 連絡事項

- ・ 実践事例集のまとめ方について

5 閉会

第1回～第3回「学校支援地域本部」部会 意見の概要

◆これまでの取組から見える課題解決の観点	◇そのための手立て等
※リーダーシップ *事業の所管	・湖南省においては、学校教育課でも生涯学習課でもない教育研究所が担当している。
※コーディネーター *人選	・ある小学校では、公募により、地域コーディネーターを選任した。教員退職者でない方が望ましいと考えた。 ・ボランティアさんへの依頼を考えた場合、地域の人材に精通している人が求められる。
*資質	・これまでの職業(ケア・マネージャー)で培われた「聞く」姿勢が、地域コーディネーターの仕事に活かされている。 ・それぞれのコーディネーターさんの特性(強み)を活かしたい。 コーディネーターさんに全てを望むべきではない。
*教職員との交流	・給食で残った牛乳を活用し、カフェオーレを作り、職員に振る舞うなどし、職員との距離を縮めることができた。 ・自分が担当している学校の音楽会に感動し、放課後にお菓子を配ったことにより、自分の存在を認められた。そのことが先生と仲良くなることにつながった。
*活動内容	・教職員と協力し、図書室のレイアウトを考えたり、家庭科室を使いやすいように配置等考え直した。 ・これまでの経験等を活かし、ボランティアを活用している。 フットワークが大切である。 ・教師の領域に入らないようにしている。
*連絡調整 * 役割	・学校のニーズと支援者の思いをうまくつないでいくことが大切である。 ・地域コーディネーターが、地域と学校とのパイプ役となっている。
※ボランティア *活動の基本	・学校のニーズに合った活動を進めること。
*組織	・ボランティア組織ができたので、活動しやすくなってきた。
* モラル	・ボランティアの集団が形成される時、心地よい状態が形成されなければならない。ボランティア活動は、最終的に人格の形成をめざす。ボランティア集団の背中を見て、子どもが育つ。
*規則	・喜多郷土クラブ(ボランティア)規則を作成し、共通理解を図っている。
*今後に向けて	・委託事業から補助事業に変わり、ボランティアさんに自立していただくようにしている。地域コーディネーターさんがおられないと、どうにもならないこともある。
*連絡調整、認識のズレ 学級担任と支援者との間に支援活動にかかわる認識のズレが生じる場合がある。 *支援者は、必ずしも活動があるとは限らない。	・学級担任とボランティアとの連絡調整の難しさを支援者にも伝えていく。 ・学校のニーズと支援者の思いをうまくつないでいくことが大切である。
*教職員の認識 ボランティアやコーディネーターがおじゃま虫に扱われる学校が見られるのは、残念だ。	
※学校長 *認識・姿勢	・校長が全ての軸になっている。校長自身が感じて動かないといけな い。この取組の仕掛け人にならないといけな ・校長が人事異動で替わると、学校の取組もガラリと変わる。学校としての責任を意識しすぎる校長が見られる。 ・校長の事業に対する認識の違いが校内職員の理解度に表れている。そのため、地域コーディネーターが活動しやすい学校とにくい学校とに分かれる傾向が見られる。

	<ul style="list-style-type: none"> ・校長のマネジメント力が大切であり、地域と学校とをつなぐことが大切だ。(地域の価値観を受け入れていくことから始まる。) ・世の中は、アバウトな中で動いている。そのため、校長研修会を実施し、研修を深めている。校長が動かないと、地域は動かない。
*地域との関係づくり	・校長は、他のポジションに比べ融通が利きやすい。地域との関係づくりに力を注いでいる。
*学校経営管理計画への位置づけ	<ul style="list-style-type: none"> ・体験活動を重視した取組を進めている。 ・全学年で学校支援地域本部に関わる取組を進めている。(重点目標との関連) ・新しい北里文化の創造に努めている。 ・地域の子どもに付加価値(学力・生きる力)をつけて地域の担い手にしたい。
*校長研修	・コーディネーターの研修会はあるが、校長の研修会はないので、県として取り組んでほしい。
※教職員	
*調整能力	・コーディネーターが全ての取組をやってしまうと、若い教師が育たない。先生方の調整能力が必要である。
*役割	・さまざまな方が入られた時、どんな役割をするのか、そのマネジメントが求められ、教職員が役割としてマネージャーになる必要がある。
※開かれた学校づくり	
*学校職員は、地域に出向かない傾向がある。また、無理に地域に出るように言うとかえって、頑なになってしまう。	<ul style="list-style-type: none"> ・暗黙の中で学校・地域コーディネーター・ボランティアの関係性が大切である。そのために茶話会を企画するのもよい。 ・日頃から校長が教職員へ保護者・地域の信頼を得よう話をしていく。
※研修について	
*地域コーディネーター	・地域コーディネーターの資質向上をめざし、市独自の研修を行っている。
※活動内容	
	<ul style="list-style-type: none"> ・交換日記に取り組んでいるところも見られる。 ・子どもたちと認知症の方との田んぼでの交流 ・持久走大会、茶道、スポ小との積極的な交流 ・ボランティア活動は、全体的にうまく活動できている。
*データベース化	・教材のデータベース化に取り組んだ方がよい。
*温度差	・同一地域でも、学校により取組方の違い(温度差)が見られる。
*主導権	・環境支援に比べて学習支援が多い場合は、学校側が主導権をもち、進めている。
*ゲストティーチャー	・ゲストティーチャーの活かし方を工夫したい。
※活動組織	
*まちづくり協議会	・まちづくり協議会が下部組織として位置づいている。この人たちに言いにくいことを代弁してもらっている。
*依頼	<ul style="list-style-type: none"> ・地域教育協議会のメンバーを充職にせず、地域に出向き依頼をした。 ・地域住民への説明会で力を貸して欲しいことを依頼した。
※持続的かつ安定的な仕組みづくり	
*今後、学校支援地域本部事業は、どのように成長していけばよいのか	<ul style="list-style-type: none"> ・持続的かつ安定的な仕組みづくりの一つの取組として、学校ボランティア・ポイント、地域ボランティア・ポイントに取り組んでいる。 ・まず動く、どう動かか・・・学校支援地域本部事業のミソ
※地域の認識	
*地域の応援団の意識の中には、自分たちがしてやっているという気持ちが見られ、学校側はしてもらっているようになりやすい。学校が主、地域が従の関係になりやすい。	・学校も地域も同じ目の高さで地域の子どもを育てていこうとする意識が必要である。そのため、応援団はやめてくれと言っている。

※地域との連携 *お父さんや地域の役割とは何か	・おやじクラブでは、自分の子どもを窓口にして、もっと地域を知ろう、地域と連携していこうとしている。学校のニーズとは違うかもしれないが・・・
*地域の方々の思い	・地域の方々の思いが届かないことがある。ボランティアのこういことがしたいという声を学校に届けたい。
※地域の活性化	・近江八幡市北里商店街では、ボランティアポイントを採用している。買い物をしてもらうことが商店街の活性化につながっている。 ・ボランティアポイント(キット・カード)の活用が来店促進、地域の活性化につながる。
※成果 *公立学校の課題	・この事業の取組を通して、子どもはどう変わったのか、その成果を問わなければならない。 ・地域によっては、住民の離婚率や就学支援率がとても高い現状が見られる。そうした状況の中で、この取組が総合的に求められる。これからの公共型学校づくりは、どうあるべきなのか、探していきたい。 ・荒れている学校に地域の人が交通マナーアップ等でかかわることにより、成果が見えてきた。
* 他府県の事例	・和歌山県では、この事業の成果として子ども達が前向きになっている事例が報告されている。そうした成果が現れると先生達も前向きになれる。
*成果報告会	・広報活動、成果報告会を行っている。
*育てる心	・愛校心を子どもたちに伝えたい。
※予算面 * 取組例 * 財政基盤の確保	・継続的な予算の確保が課題である。 ・財政基盤をどのように確保していくのか、そのための視点や経営者の発想が必要となる。
※取組の継続	・学校支援地域本部事業は必要であり、これからも地域と協働で子どもを育てる取組を継続したい。
※社会教育	・今までの社会教育は時間的にも経済的にも恵まれた方のみが対象となってきた面が見られた。一方で、学校では、保護者対応・児童対応で精一杯で底辺におかれる家庭にまで手が届きにくい状況が見られる二極化がある。学校支援地域本部が家庭教育支援活動と連携の取組を進める必要がある。
※コミュニティ・スクール	・学校支援地域本部が補助事業に移行し、コミュニティ・スクールへとシフト・チェンジしている動きが見られる中、コミュニティ・スクールとの関係性をどのようにとらえていけばよいか。 ・コミュニティ・スクールのように学校運営に対して、意見を求めるようにするなど、一気に理想型を目指すのではなく、段階をふんでいくことが重要である。
※実績の積み上げ	・コミュニティ・スクールは、意思決定をするところで、学校支援地域本部は、そのための執行部隊である。現場の積み上げがないと立ちゆかない。そのための事例が欲しい。現在は、模索の時期である。トライアンドエラー。失敗してもよい。
※取り組む意義	・生涯学習課がこの事業を所管する意義を考えると、学校と地域の互恵性が必要である。地域・社会の意義を考えていきたい。学校と地域との関係をしっかり構築していきたい。